

研究員 の眼

自動運転が普及したときの まちづくり

完全自動運転が普及した社会とまちづくり。その9

社会研究部 准主任研究員 塩澤 誠一郎
(03)3512-1814 shiozawa@nli-research.co.jp

筆者が完全自動運転の移動サービスに最も期待することは、すべての人をあらゆる移動制約から解放することだ。クルマがなくても自由に移動できる。免許がなくても自由に移動できる。身体が不自由でも自由に移動できる。お金がなくても自由に移動できる。ということである。そうであれば、移動は楽しいものになるだろう。完全自動運転の移動サービスはそこをめざすべきである。

そのような社会がもたらされれば、人々は必要性より、楽しさを求めて移動するようになるはずだ。自動運転の移動サービスで、楽しい場所に移動する。ただし、そこでは徒歩で過ごすだろう。人気のあるまちに電車を出かけてブラブラする、広い公園にクルマで行きのんびり過ごすという行動は、完全自動運転が普及した社会でも変わらないはずだ。

また、人々は利便性より、魅力的な場所に住まいを求めよう。今は通勤や通学に便利な立地を優先する傾向があるが、それ以上に、地域の魅力を評価して住まいを選択するようになる。地域の魅力とは、例えば、散歩が楽しそうとか、コミュニティの質が高いとか、理想的な子育てができるなどだ。何に魅力を感じるかは、人それぞれであろうが、住まいの選択肢は今より確実に広がるはずである。

このように考えると、まちづくりの方向性も見えてくる。まちは魅力的で、人々を惹き付けるものでなくてはならない。そして、歩いて楽しめなければならない。そうでなければ人が来たり、暮らそうと思ったりしない。

この方向性は、商業地も住宅地も変わらない。もちろん楽しみ方の質は異なる。しかし、いずれにしても、まちの魅力を高め、歩いてひとときを過ごすことができるようにすることが、これからのまちづくりにとって重要になる。だからこそ、駐車場など、完全自動運転の普及によって必要なくなる空間を、まちの魅力づくりのために活用するのである。

さて、魅力を高める、歩いて楽しめるといったまちづくりの方向性は、実に古くから言われていることだ。まちづくりに携わる者にとっては、常にそこを意識してきた面がある。しかしながら、自家用車での移動を前提にした社会では、それが十分に実現できなかったと言える。

完全自動運転の普及によって、そのようなまちづくりが実現することを期待するのである。